

巻頭言

平成 14 年 3 月 1 日、「成育医療」という新しい理念を掲げて、国立成育医療センターが開設され、およそ 2 年半が経過しました。この間、病院は着実に発展し、この 1 年余り、ほぼフル稼働の状態となっています。同じ敷地内に遅れて着工した研究所の建設も本年 10 月には完成して、もと国立小児病院のあった太子堂から移転、開所の運びとなり、ここでようやくこの大蔵の地に国立成育医療センターが完成することになりました。

もとより、病院にしても研究所にしても、重要なのは建物、設備ではなく活動の内容です。ナショナルセンターの機能として掲げられている診療、研究、教育・研修、情報集積・発信のそれぞれについて、成育医療センターが期待されている役割を十分に果たしているかが問われており、内部的にまた外部からも厳しく評価されなければならず、その評価は国際的水準あるいは視野からなされなければなりません。

当センターの掲げる成育医療の概念も次第に定着しつつあるように感じられますが、なお一層、推進・普及させる必要があります。センターはそれを先導する役割を負っています。一方、長い時間をかけて計画され、実施されたセンターの運用面のさまざまな仕組みも、開設から 2 年余りを経過し、その実績を踏まえ、また時代の要請によって、修正しなければならない点も出てきています。さらにもっと重要なことは、これからの飛躍のために長期的な戦略を打ち立てるべき時期に来ていることでありましょう。

昨年発行された平成 14 年度（2002）年報・業績集に続いて、今回平成 15 年度（2003）年報・業績集が発刊されることとなりました。成育医療センターの活動を飛行機に例えれば、平成 14 年度は離陸直後、平成 15 年度も高度を次第に上げつつある過程といえましょう。本年報に収載されている診療に関する諸統計数値、各部門の活動状況、調査・研究業績は、全職員の努力の集大成です。センター内外の多くの方々の目にとまり、素直な評価あるいはご意見をいただくことを願うとともに、平成 16 年度さらにその後続く発展への土台にしたいと考えています。

国立成育医療センター総長 柳澤正義

平成 16 年 12 月